

小児看護学実習において看護学生が小児がんの子どもに関わる際の意識と行動の変化

阿部裕美, 佐藤佳代子

Changes in Awareness and Behavior of Nursing Students That Encounter Children with Cancer in Pediatric Nursing Training

Hiromi ABE and Kayoko SATO

キーワード：小児看護学実習，看護学生，小児がん，意識，行動

概 要

小児看護学実習において看護学生の小児がんの子どもに関わる際の意識と行動の変化を明らかにすることを目的に、6名の学生を対象に白血病を含めた小児がんの子どもに関わる際の意識の内容に焦点をあて、内容の類似性からカテゴリ化を行い質的帰納的に分析した。分析の結果、【がんに対する先入観とイメージの変化】【子どもが安心できる声掛けと態度】【子どもに対する共感的理解】【子どもを尊重する】【母子の関わりを大切にする】の5カテゴリが抽出された。看護学生は、がんに対する先入観に影響されながらも子どもに積極的に関わることで、イメージを肯定的に変化させていた。また、子どもが安心できる声掛けや態度を意識し、子どもとの関係形成に向けた行動を示したり、子どもの思いを尊重し子どもの持つ力を引き出すよう行動していた。さらに、母親の思いを感じとりながら母子の関わりを大切にするにも意識し行動していることが明らかとなった。

1. 緒 言

小児がんとは、15歳未満の子どもにおこる悪性腫瘍の総称であり、白血病、脳腫瘍のほか神経芽腫をはじめとする種々の胎児性腫瘍や肉腫などの固形腫瘍が存在する¹⁾。近年、小児がんは医療の進歩により治癒率は上昇してきており、急性リンパ性白血病や悪性リンパ腫における5年生存率は約70～80%に達するようになり²⁾、治療への期待も高まってきている。しかし、小児がんは現在も子どもの病気による死因の上位を占めている。そのため、治療に伴い入院期間は長期間にわたり、子どもにとってその治療は身体的にも精神的にも苦痛が大きく、また家族にとっても同じように苦痛や不安を抱え危機的状況に陥りやすい現状がある。小児がんの子どもと家族を看護する看護師は、常に最新の知識や根拠に基づいたケア技術を探究し、子どもの苦痛の緩和や家族の抱える不安をできるだけ軽減する

よう、よりよいケアを実践していかなければならない。しかし、子どもへの苦痛緩和やケア不足、親へのケアに関して葛藤や後悔など、看護師が困難感やストレスを抱きながら看護をしている実態についての報告³⁻⁵⁾もあり、小児がんの子どものQOLの保証やケアの質の向上に向けた支援は重要である。

昨今の看護学生（以後、学生とする）の多くは、子どもと接する経験の少ないことから、短い実習期間の中で病気をもつ子どもと関わることに不安や緊張感を抱いていることが多い⁶⁾。さらに、学生は「がん＝死、恐ろしい病気」というイメージが根強く構造化されている⁷⁾ことや、がんやがん患者に対して否定的なイメージを持っているという報告⁸⁾もある。このことから、学生が過酷な治療や処置を受けている小児がんの子どもを受け持ち、子どもや家族の状況を視野に入れながら看護実践していくことは、学生の不安や緊張感をより一層高め、小児がんの子どもとの関わりや看護援助に躊躇しているのではないかと推測される。そのため、学生が抱く小児がんの子どもに対する意識や看護援助の実際を明らかにし、小児がんの子どもへの援助をより効果的に実践できるよう教育的に支援していくこと

(平成27年10月21日受理)

川崎医療短期大学 看護科

Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

は重要であると考える。

そこで、今回は、小児看護学実習において学生が小児がんの子どもに関わる際、どのようなことを意識しながら行動しているのかを明らかにし、教育上の示唆を得たいと考えた。

2. 小児看護学実習の概要

A短期大学の看護科における小児看護学実習は、3年次の4月～9月にK大学附属病院において2週間2単位の实習が行われ、そのうち5日間を小児病棟で実習している。1グループの学生数は6～7名である。病棟実習では、1人の子どもを受け持ち看護を実践し、その子どもと付き添う家族と関わりながら小児看護学の実践を学んでいる。受け持つ子どもは、主に療養生活の援助を必要とする乳児期、幼児期、学童期を優先して病棟師長と教員が相談して選定し、その中から学生自身の実習目標に合った受け持ちの子ども1名を選んでいる。

3. 研究方法

1) 調査対象

A短期大学看護科に在籍する3年生のうち、小児看護学実習において小児がんの子どもを受け持ち、研究調査の同意が得られた学生6名である。

2) 調査期間

小児看護学実習終了後の2013年9月25日～10月5日

3) 調査内容

無記名の自記式質問紙調査法であり、質問紙の内容は、①受け持った子どもの背景(年齢、性別、疾患名、治療経過等)、小児がんの子どもに関わる際に、②「意識したこと」、③「困難と感じたこと」、④「実際の看護援助」とした。質問紙へ回答する場合は、小児看護学実習を振り返って子どもとの関わり場面を提示し具体的に記述してもらった。

4) データの収集と分析方法

調査の協力依頼は、小児看護学実習を終え成績評価後に行った。データ収集は、研究者が小児がんの子どもを受け持った学生に対し、研究調査の趣旨を口頭と文書で説明した後、質問紙を配布し、後日所定の場所に投函する形で回収した。

分析方法として、Berelson, Bの方法論を参考にした看護教育学における内容分析⁹⁾を用いて行った。受け持った小児がんの子どもに関わる際に「意識したこと」、「困難と感じたこと」、「実際の看護援助」の記述

について、意味内容を損なわないように簡潔な文章で表現し、コード化した。そこから、それぞれ意味内容の類似性を考慮し、コードをまとめたものをサブカテゴリー化、カテゴリー化を行い、質的帰納的に分析した。データ分析過程においては、繰り返し研究者間で協議し、信頼性、妥当性の確保に努めた。

5) 倫理的配慮

本研究の目的・方法、研究への協力は自由意思によるもので拒否や中止、中断が可能であること、研究への参加・不参加は小児看護学の成績には影響しないこと、質問紙への回答は無記名であり個人は特定されないこと、答えたくない内容については答えなくてもいいこと、研究終了後、記録データはすべてシュレッダー等で粉碎処理すること、研究結果は学会等に発表予定であることを文章および口頭で説明し、質問紙の提出をもって同意を得たこととした。

4. 結果

小児看護学実習において小児がんの子どもを受け持った学生13名のうち、調査の同意が得られた6名を研究対象とした。研究対象者は全員女子学生であり、学生自らが小児がんの子どもを受け持ちを申し出た。

なお、今回は、子どもに関わる際に「意識したこと」について焦点を当て報告する。

1. 学生が受け持った子どもの特性

学生が受け持った小児がんの子どもは、男児1例、女児5例の計6例であった。診断名は、急性リンパ性白血病4例、松果体胚細胞腫1例、悪性リンパ腫1例であった。年齢は、3～11歳であり、幼児期(3～4歳)2例、学童前期(8歳)1例、学童中期(9～10歳)2例、学童後期(11歳)1例であった(表1)。

2. 分析結果

学生が小児がんの子どもと関わる際に意識したことは、16サブカテゴリーから、5カテゴリーが抽出された。5カテゴリーの内訳は【がんに対する先入観とイメージの変化】【子どもが安心できる声掛けと態度】【子どもに対する共感的理解】【子どもを尊重する】【母子の関わりを大切にする】であった(表2)。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを《 》, 記述内容を〈 〉で示し述べる。

学生が小児看護学実習において、小児がんの子どもと関わる際に意識したことは、がん疾患の子どもという特徴が反映されている内容と、がん疾患を含むすべての子どもに関わる内容から構成されていた。

表1 学生が受け持った子どもの特性

対象者	性別	年齢	疾患名	治療内容・状況等
A	女兒	3歳	急性リンパ性白血病	化学療法, 脱毛あり
B	女兒	4歳	急性リンパ性白血病	化学療法, 脱毛あり, 清潔隔離中
C	女兒	8歳	急性リンパ性白血病	化学療法, 脱毛あり, 清潔隔離中
D	女兒	9歳	急性リンパ性白血病	化学療法, 脱毛が始まる
E	女兒	10歳	松果体胚細胞腫	化学療法, 放射線療法, 脱毛なし, 清潔隔離中
F	男児	11歳	悪性リンパ腫	化学療法, 脱毛あり

表2 小児がんの子どもとかわる際に意識したこと

n = 6, () コード数, 32コード

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
がんに対する先入観とイメージの変化 (4)	がんという先入観から言葉かけに工夫が必要(4)	がんのイメージは重篤な病気
		がんは生命と直結している
		小児がんの子どもは表情が暗くあまりしゃべらない
		常に不安を抱えており, 不用意なことは言えない
	子どもががんであるという意識からくる会話の内容と配慮(3)	がんという病気のことを意識しながらコミュニケーションを図る
		恐怖心や不安を与えるような会話は避ける
		タイミングや距離感を考えながら声をかける
	子どもからの病気に関する質問についての対応の仕方(2)	子どもから病気や治療について質問されるかもしれないという不安
		自分の発言から子どもに病気のことを悟られたらどうしようという緊張感
	小児がんの子どもに対するイメージが肯定的に変化(3)	治療に対し前向きな姿に力強さを感じる
		予想していたよりも明るくおしゃべりである がんの子どもも他の子どもと変わらない
	子どもが安心できる声掛けと態度 (4)	子どもの発達段階に合わせる(3)
丁寧にゆっくり話す		
年齢に応じてわかりやすく話す		
安心できる声掛けの工夫(2)		子どもの目線に立って話をしたり会話をする
		子どもが不安や恐怖心をもたないようにする
笑顔で接する(1)	常に笑顔で接する	
子どもに対する共感的理解 (4)	子どもの傍にいる(1)	病状に合わせてながら, できるだけしっかり訪室する
		子どもが楽しそうにしているときは一緒に楽しむ 子どもが辛そうにしているときは共感的な態度で接する
	子どもの思いに共感する(2)	子どもの好きなキャラクターを覚える
		子どもの会話の内容に合わせる
	子どもを承認する(1)	子どもが苦い薬が飲めたときや採血, 検査を頑張ったときはしっかりほめる
子どもを尊重する (2)	子どもの意思を尊重する(2)	今, 何をしたいのかを子どもに直接聞く
		子どもと一緒に遊びに参加してもいいか尋ねる
	子どものペースに合わせる(1)	子どもができるという準備が整うまで待つ
母子のかかわりを大切にする (2)	母親の存在の重要性を意識する(2)	母親は子どもにとって大きな存在
		母親は子どもが一番安心できる存在
	子どもと母親との時間を大切にする(2)	親子で過ごす時間をつくる 訪室のタイミングを見計らう

1) 【がんに対する先入観とイメージの変化】

このカテゴリーは、《がんという先入観から言葉かけに工夫が必要》《子どもががんであるという意識からくる会話の内容と配慮》《子どもからの病気に関する質問についての対応の仕方》《小児がんの子どもに対するイメージの変化》の4つのサブカテゴリーから構成された。

今回学生は、最初、小児看護学実習において受け持つ子どもを決める際、学生自らが小児がんの子どもを希望していたが、いざ、子どもとの関係を形成する上では、〈がんのイメージは重篤な病気〉、〈がんは生命と直結している〉というイメージが強く、それに影響し〈小児がんの子どもは表情が暗くあまりしゃべらない〉、〈常に不安を抱えており、不用意なことは言えない〉など、《がんという先入観から言葉かけに工夫が必要》であると認識しており、〈がんという病気のことを意識しながらコミュニケーションを図る〉、〈恐怖心や不安を与えるような会話は避ける〉、〈タイミングや距離感を考えながら声をかける〉など、《子どもががんであるという意識からくる会話の内容と配慮》について意識していた。また、学童期の子どもと関わる際に、〈子どもから病気や治療について質問されるかもしれないという不安〉をもっていたり、〈自分の発言から子どもに病気のことを悟られたらどうしようという緊張感〉を抱え、《子どもからの病気に関する質問についての対応の仕方》について意識していた。その一方で、子どもが自分の置かれている状況を理解しながら頑張っている姿を見ることで〈治療に対し前向きな姿に力強さを感じ〉ていたり、子どもとのコミュニケーションについての不安を抱えていたにも関わらず、子どもの方から積極的に話をしてくれることから〈予想していたよりも明るくおしゃべりである〉〈がんの子どもも他の子どもと変わらない〉など、学生は子どもとの直接的な関わりを通し《小児がんの子どもに対するイメージを肯定的》に変化させながら関わっていた。

2) 【子どもが安心できる声掛けと態度】

このカテゴリーは、《子どもの発達段階に合わせる》《安心できる声掛けの工夫》《笑顔で接する》《挨拶をする》の4つのサブカテゴリーから構成された。

学生は、〈毎日明るく優しい口調で接する〉ことや、〈丁寧にゆっくり話す〉、〈年齢に応じてわかりやすく話す〉など《子どもの発達段階に合わせる》ように話す姿勢や態度について意識していた。また、子どもに安心感を与えられるよう〈子どもの目線に立って話を

したり会話をする〉、〈子どもが不安や恐怖心をもたないようにする〉など、《安心できる声掛けの工夫》を考えたり、子どもの前に立つときは《笑顔で接する》ことを常に意識していた。そして、子どもとの関係形成のための基本姿勢として、子どもや付き添っている母親に対し丁寧に《挨拶をする》ことを忘れず、関係づくりにおいても意識していた。

3) 【子どもに対する共感的理解】

このカテゴリーは、《子どもの傍にいる》《子どもの思いに共感する》《子どもが示す興味・関心を探る》《子どもを承認する》の4つのサブカテゴリーから構成された。

学生は、限られた実習期間の中で子どもに受け入れてもらえるかという戸惑いを感じながら、子どもの〈病状に合わせながら、できるだけしっかり訪室〉し《子どもの傍にいる》ことを意識し、子どもに孤独や不安を感じさせないように子どもとの時間を共有していた。また、〈子どもが楽しそうにしているときは一緒に楽しむ〉ことや〈子どもが辛そうにしているときは共感的な態度で接する〉ようにし、《子どもの思いに共感する》ことで情緒面を支えていた。そして、〈子どもの好きなキャラクターを覚える〉ことや〈子どもの会話の内容に合わせる〉など、《子どもの示す興味・関心を探る》ことで子どものことを理解しようと努力しながら関わっていることがうかがえた。さらに、〈子どもが苦い薬を飲めたときや採血、検査を頑張ったときはしっかりほめる〉ことを毎回忘れずに行い《子どもを承認する》ように意識していた。

4) 【子どもを尊重する】

このカテゴリーは、《子どもの意思を尊重する》《子どものペースに合わせる》の2つのサブカテゴリーから構成された。

学生は、子どもの長期にわたる入院生活や治療の影響による身体的苦痛の出現、感染予防などの観点からさまざまな制限を強いられている子どもの思いや声に耳を傾け、子どもへの関わり方を模索しながら向き合っていた。その際に遊びの援助を考えるときは、学生が先に決めるのではなく、〈今、何をしたいのかを子どもに直接聞く〉ことや、〈子どもと一緒に遊びに参加してもいいか〉などを尋ね、《子どもの意思を尊重する》ようにしていた。また、バイタルサイン測定を実施するときや抗がん剤など薬を内服する時、〈子どもができるという準備が整うまで待つ〉など、《子どものペースに合わせる》ことを意識していた。

5) 【母子の関わりを大切にす】

このカテゴリーは、《母親の存在の重要性を意識する》《子どもと母親との時間を大切にす》の2つのサブカテゴリーから構成された。

子どもの長期にわたる療養生活を支えている家族、特に〈母親は子どもにとって大きな存在〉であり、〈子どもが一番安心できる存在〉としてとらえており、学生は《母親の存在の重要性を意識》していた。また、子どもが母親に甘えたり、不機嫌で怒りをぶつけるなど子どもがストレスを発散させたり、情緒的に不安定な姿が見られたときには、〈親子で過ごす時間をつくる〉ことや〈訪室のタイミングを見計らう〉ことで、母親が常に子どもの支えとなる存在でいられるように、学生は席を外し、《子どもと母親との時間を大切にす》ことを意識し関わっていた。

5. 考 察

1. がんに対する先入観が影響する意識と行動

学生は最初、小児がんの子どもに対し否定的なイメージを抱いていることから、子どもとの会話の内容に悩んだり、距離のとり方などコミュニケーションについて不安や緊張感を持ちながら関わっていることが示された。これは、がんという先入観が影響していると考えられ、学生のがんに対する受け止めと構えが反映されていると思われる。杉谷¹⁰⁾らの報告においても、がん患者を受け持った学生は、他の疾患患者を受け持った学生に比べコミュニケーションに困難感を強くもっていると述べており、同様の結果を示している。

一方、子どもの治療に対する前向きな姿を目の当たりにし、子どもの力強さや明るさを実感することで、他の子どもと変わらないことを直接的な関わりから体験し、学生は小児がんの子どものイメージを肯定的なものへと変化させている。このことは、山本ら¹¹⁾の看護学生のがんに対するイメージと影響要因について調査した結果からも、知識のある学生や実習でがん患者を受け持った学生は、がんの子どものイメージを肯定的に変化させていることを明らかにしており、本研究でも裏付けられた。このように小児がんの子どもとの直接的な関わり体験は、イメージを肯定的に変化させていくことへつながることから、早期の段階から学生が正しい知識をもって子どもと積極的に関わり、良い関係が築けるよう支援していくことが必要であると示唆された。

2. 子どもとの関係形成に向けた意識と行動

学生にとって、小児看護学実習での小児看護の実践は初めての体験であり、学生は不安ななかで実習に臨み、限られた実習期間のなかで子どもとの関係を築いていかなければならない。また、初めて小児がんの子どもを目の前にして受け入れてもらえるかという不安と緊張感を抱きながらも、子どもが示す興味・関心ごとを探り、できるだけ子どもの傍に寄り添い、子どもとの時間を共有したり、子どもができたことや頑張ったことをほめ支えることを意識して関わろうと行動している。柴¹²⁾は、小児看護学実習において学生は受け持ち患児と関係形成を行っていく際に、まず受け持ち患児とかかわっていくための手がかりを見つけようとし、患児の興味を探り、融和化を図っていると述べているように、学生は小児がんの子どもとの関係性を築くことについても、すべての子どもとの関係づくりを行う場合とほぼ同じプロセスを踏み、徐々に距離を縮めていたものと考えられる。そして、子どもの声や思いを尊重しながら子どもを理解し、子ども自身が病気と生活を調和させながら成長発達を遂げられるよう、子どもの持つ力を引き出すことにも視点が向けられた行動をしていると考えられる。このように学生が小児がんの子どもと関係を築いていこうと行動化しているときは、タイムリーに助言を行い、子どもと関わる際のアイデアを提示したり、学生のとる行動を確認し肯定的に評価しながら、関係形成がスムーズに築けるよう配慮することが必要であるといえる。

また、初めて小児がんの子どもと関わる学生が、小児がんの子どもと良い関係を築き、がん看護を実践していくためには、多くの知識を活用していかなければならない。学生は、机上の知識だけで現在の子どもの病状について理解はできても、治療に伴い経時的に子どもの病状は変化し、身体的状態もさまざまであることから、先を見越した関わりや看護を考えることは難しいと思われる。そのため、指導者や教員は学生の知識や学習レベルに合わせて、子どもの状況を的確にアセスメントし看護実践に結びつけて考えられるよう助言をくり返し行っていく必要があるといえる。そして、学生が直面している問題や体験したことの意味を学生が理解できるよう働きかけ、支援していくことが重要である。

3. 母親との関係形成に向けた意識と行動

学生は子どもとの関わりを通し、24時間子どもの日々変化する状態に対応している母親の姿を間近に見る

ことで、母親は子どもにとって一番安心できる存在であり、常に子どもの支えになっていることを確認している。そこから親の思いを感じとり、子どもや付き添っている母親の力を発揮できるよう、学生は母子の関わりを大切にすることを意識しながら行動している。これらのことは小児がんの子どもに特化した状況に関する内容とは言えないが、小児看護における家族との関係形成は重要なポイントの一つでもある。そこから、学生は常に子どもと母親とのコミュニケーションにも意識しながら子どもに関わっていくことの重要性を認識していると考えられる。そして、子どもや母親と良好な関係が図れるほど学生の心理的負担は少なくなり、子どもができるという準備が整うまで待つなど、子どもに合わせた看護を考えるゆとりも生まれてきたものといえる。小代¹³⁾は、看護学生にとって、親との関係を築くことは、子どもとの関わりを容易にし、看護学生の自信にもなると述べている。小児がんの子どもを持つ親の心理状況は複雑であることが多いため、小児がんの子どもを受け持つことが決定した段階から教員は、学生と母親との関係が良好に形成できるよう調整役となり、関係形成の状況を常に把握しておく必要があるといえる。

6. おわりに

今回、小児看護学実習において、学生は小児がんの子どもに関わる際、がんに対する先入観に影響されながらも子どもに積極的に関わることで小児がんの子どもに対する否定的なイメージを肯定的に変化させていた。そして、子どもとの関係形成に向けた行動を示したり、子どもの思いを尊重しながら子どもの持つ力を引き出すよう意識し行動していた。また、母親との関係形成に向けた行動や母子の関わりを大切にすることにも意識し行動していることが明らかとなった。

小児がんの子どもへの関わりにおいて重視されるべきことは、子どもの治療に取り組む気持ちの維持・向上や、回復力の向上、生活のなかでの楽しみや安楽をもたらすことなどである。そのためにも、学生に対し、単なるがん治療や看護の知識・技術を教授するだけでなく、がんの治療に前向きに取り組みながら生きている子どもを支えていくような視点で関わるができるように教育していくことが必要であると示唆された。そして、小児看護学実習において、学生が小児がんの子どもを受け持つことにより、子どもやその家族が療養生活上、不利益を被ることなく子どもとその家

族の生活の質の向上につなげられるよう、本研究で得られた示唆を活かし教授内容や臨地での指導方法について工夫していきたい。

また、今後も引き続き、学生が小児がんの子どもに関わる際に「困難と感じたこと」や「実際の看護援助」についても分析を進めていきたい。

7. 今後の課題

今回の調査では、研究協力者のデータは比較的小児がんの子どもとの関係性が築けていた事例が多かったため、偏りも考えられる。また、調査協力については、すべての臨地実習が終了した時期に依頼したため、小児看護実習の最初の実習クールで小児がんの子どもを受け持った学生には協力が得られにくかったことも考えられる。

今後は、調査時期の検討や研究協力が得られなかった理由についても明らかにし、新たな教育支援が得られるようにしていく必要がある。

8. 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力をいただきました学生の皆様に心より感謝いたします。

なお、本研究は第12回日本小児がん看護学会学術集会において発表したものに、一部加筆修正を加えたものである。

9. 文 献

- 1) 細野亜古, 牧本 敦: 小児がんの症状緩和におけるがん化学療法役割と限界, *がん患者と対処療法*16(1): 63—67, 2005.
- 2) 牧本 敦: 小児がんの化学療法, *Nursing Today*, 23(12), 117—122, 2008.
- 3) 三澤 史, 内田雅代, 駒井志野他: 小児がんをもつ子どもと家族のケアに関する看護師の認識(第2報) —ケアに関してどのような問題を感じているのか—, *小児がん看護* 3, 63—74, 2008.
- 4) 名古屋裕子, 塩飽 仁, 鈴木祐子: 看取りの時期にある小児がんの子どもとその親をケアする看護師が抱える葛藤, *日本小児看護学会誌*22(2): 41—47, 2013.
- 5) 野中淳子, 熊谷恵子: がんの子どものターミナルケアにおける看護の実態, *日本小児看護学会誌* 9 (2): 13—19, 2000.
- 6) 小代仁美, 榎木野裕美: 小児看護学実習において看護学生がこどもと関わることを躊躇させる影響要因, *日本看護研究学会雑誌*33(2): 69—76, 2010.
- 7) 塚本康子, 奥 祥子, 伊藤志乃, 牛尾禮子: 看護学生のがんに対する態度構造, *日本看護学教育学会学術集会講演集*(12): 85, 2002.
- 8) 沼沢さとみ, 山田皓子, 斎藤亮子, 井上京子: 看護学生が

- 描くがん患者のイメージ, 日本がん看護学会誌(19) : 166, 2005.
- 9) 舟島なをみ : 質的研究への挑戦 第2版, 東京 : 医学書院, pp.51—79, 2007.
- 10) 杉谷かずみ, 犬童幹子 : 看護学生のがんイメージと教育的役割, 日本がん看護学会誌(17) : 99, 2003.
- 11) 山本晴実, 木村 愛, 名越恵美 : 看護学生のがんイメージと影響要因の分析, 日本緩和医療学会学術大会講演抄録集(13) : 282, 2008.
- 12) 柴 邦代 : 小児看護学実習における学生と受け持ち患児との関係形成プロセス, 看護研究38(59) : 51—64, 2005.
- 13) 小代仁美, 檜木野裕美 : 小児看護学実習において看護学生がこどもの人間関係の形成に向けて一歩踏み出すために影響する要因, 日本小児看護学会誌18(2) : 9—15, 2009.

